



少年小說大系

戰時下少年小說集

江苏工业学院图书馆

卷

藏 书 章

根本正義編

少年小説大系 第10巻
戦時下少年小説集

一九九〇年三月三十一日 第一版第一刷発行

尾崎 秀樹

監修者 小田切 進

紀田順一郎

発行者 畠山 滋

発行所 株式会社三一書房

〒113 東京都文京区本郷2の11の3

☎03(812)3131

振替東京9—84160

印刷 株式会社 新栄堂

暁美術印刷株式会社(扉・口絵・函印刷)

製本 株式会社 鈴木製本所

製函 高田紙器

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-380-90547-0

©一九九〇年

Printed in Japan

戰時下少年小説集

目次

氏原 大作

いくさ土産……………九

長谷 健

開拓村の子供……………三

赤川 武助

僕の戦場日記……………一七

吉田甲子太郎

秋空晴れて……………三

吉田甲子太郎

負けない少年……………三

宮崎 博史

春太郎漂流記……………三

大林清おおばやしきよし

マライの虎……………二六

高木卓たかぎたく

安南ものがたり……………三七

解説〔附・年譜〕（根本正義）……………四二

凡例

- 一、本大系のテキストは、原則として初出の雑誌掲載のものに準拠した。
- 一、本大系は、すべて現代仮名づかいにあらため、漢字は原則的に新字体で統一し、拗促音を使用した。
- 一、明白な誤植、脱字、衍字と思われるものは、これをあらためた。
- 一、難読漢字には、適宜ルビを補った。
- 一、カギ括弧、句読点等の用法は、全巻にわたって統一をとった。

戰時下少年小説集

——少年小説大系

10

——

氏原大作うじはらだいさく

いくさ土産みやげ

「いくさ土産」のはじめに

戦争から帰って来ると、待ちかまえていた子供たちが並んで、

「お父さん、お土産」

と、太郎が手を出す。

「僕には金鵒勲章」

と、次郎が手を出す。

三郎は、まだ幼くて一人前の口がきけないから、

「僕にはチナの星」

と、シナをチナと言って手を出す。

お父さんは困る。旅行していたのではないから、子供たちへ土産を買っていない。たとい買って来ても、金鵒勲章やシナの星をくれには困るのである。金鵒勲章の方はまだよいとして、シナの星になると何のことか意味もわからない。

お父さんが困る顔を見て、お母さんはにこにこ笑う。お母さんにはその意味がわかるからおかしい。それは、お父さんの出征後に生まれた三郎がむずかって泣く時、お母さんは、自分で作った歌をうたった。

日の丸たてて勇ましく

シナへ行かれた父さまの

いくさ土産に何もちた

金鵒勲章にシナの星。

坊も大きくなったなら

日の丸たててシナへ行く

手柄なされた父さまに
さてもよく似たてつかぶと。

昔の子供は、ねんねんようねんねんようで眠ったが、今の子供はただのねんねんようでは眠らない。三郎は、お母さんの歌を聞いて眠り、太郎と次郎は、「お母さん、僕もよ、僕もよ」と、お母さんにぶらさがった。三郎だけではない。僕たちもシナへ行くというのである。こうしてどの子も育った。

その話を聞いて、お父さんは前よりひどく困る。ほしいと言っても、そんなものもっていない。シナの星が無理なこととは誰でもわかるが、金鵒勲章の方は絶対にもらえぬわけのものではない。それをお父さんはもっていない。それだからお父さんは困るのである。

「あれとあれはいけない。他に何かないか。他のものなら何でもあげる」

「他のものはちつともほしくないよ」

「ほしくないでは困る。何かあるだろう。お父さんは、話ならいくらでも知っているのだがね」

「むかしむかしはいやだよ」

「おじいさんとおばあさんは、何べんもきいたよ」

「それならいくさの話はどうだ」

「いくさの話ならよい。ね、次郎」

「すてきすてき。僕、それにきめた」

三郎も手を叩いて、

「すてきすてき」

と、はしゃぐ。

お父さんは考える。お母さんが歌って聞かせたように、この子供たちが大きくなったら、日の丸をたててシナへ行ってもら

わねばならぬ。シナばかりでなく、南の海の方へも行ってもらわねばならぬ。その頃にはもう戦争はすんでいるだろうから、三人が三人とも兵隊になって行かなくてもよい。しかしどの子もみんな立派に成長して、銃をとつても、鉾こを握つても、槌つちを振つても、すべて日本人らしくやってもらいたいのである。お父さんはそう考えつつ話をして聞かせた。この話が、金鵒勲章をもつてかえれなかつたお父さんの、子供たちに対するただ一つの土産なのである。

お父さんの話はあまり面白くない、が、どの話にも日本人の血が通っている。それだから、この話を聞いて育った三人の子供は、立派な日本国民となつて、お父さんたち兵隊のあとをつぎ、その代にはやりとげられなかつた仕事を、完全に仕上げてくれると、お父さんは信じる。

これはただ三人の子供だけではない。お父さんは、この話を集めたこの書物を読むすべての子供が、三人の子供と同じになつてくれると信じる。又、お国のために祈るのである。

昭和十六年六月

氏原大作　しるす

らつきょうの山

井陘以西芋いせいいもなし

昭和十二年十月、山西省忻口鎮附近の敵を攻撃中のことであつた。

敵前三百米の塹壕さくごうの中で、木島少尉の当番永沢一等兵は、眠っている少尉の足を自分の膝の上にのせ、はいたままの長靴

をこっそり磨いていた。

打続く苦戦に、幾日も手入をしなかつた靴は、コチコチにたたまつていた。さぞ足が痛むであらうと思つて、今まで幾度となく、手入をいたししようと申し出たが、その度に少尉は笑つて、

「そんなことを気にするな。靴を磨くだけでも腹がすく、よいな骨を折らずに、じつとしておれ」

と、とりあつてくれなかつた。

これは少尉が部下をいたわる、やさしい思いやりからでもあつたが、事実この頃は、弾薬も糧食もすっかりつきはてていたので、敵が襲つて来るたびに、一本の銃剣で追払つたが、その他の時は、少しでも動かずにいて腹をすかせぬ工夫が大切であつた。それでも一等兵は当番として靴のことが気にかかり、少尉が眠っている間に、そつと手入にかかつたのである。

戦闘と戦闘の間には、夜でも昼でもみんなよく眠つた。そしてよく故郷の夢を見た。それは故郷の家で、白い米の御飯を腹一杯たべる夢であつた。しかしたべようとする時にきまつて目がさめた。自分一人かときまり悪く思いながら、そつと他の兵に聞いてみると、大抵の者がみな同じような夢を見ているのである。

「おいしいことをした。もう少しでたべられたのに、間一髪かんいっぱふというところで目がさめた」

「人間も腹がすくと、さもない夢を見るものだね」

「しかし、井陘以西芋もなしとはよく言つたものだ。口にあらうものはみんな食いつくしてしまつたからなあ」

「井陘以西芋もなし」というのは、左翼部隊長から軍司令部へあてた報告の文句で、戦線では有名な言葉であつた。

「秋風や、井陘以西芋もなし、とはどうだね」

永沢一等兵は、得意の句を作って、戦友に示した。
「はははこれは名句だ。故郷の者に聞かせたらさぞ泣くだらうな」

その時居合わせた木島少尉が、そう言ってほめてくれた。それはつい二三日前のことであった。

永沢一等兵は、そんなことを思い出しながら、なおも靴を磨いた。夜昼ぶつ通しのつかれが出て、少尉はすやすやと眠っていた。そのやつれた顔にとまる蠅を、気づかれぬように時々そっと追った。

糧食空輸

こんな日が何日も続いたが、兵隊はよくこらえた。敵の逆襲があるたびに、まるで人がちがったような元気で、突きまわって追払った。

この苦戦の最中に、全員を狂喜させるような情報伝わった。それは部隊本部の無電が、「飛行機ニヨリ糧食ヲ投下ス」という報知を受取ったからであった。

それはもう大変なよろこびかたで、中にはだきあったり、なぐりあったりする者さえあった。もう腹はいくらすいてもかまわぬのである。

「おお久しぶりに米の飯が食えるぞ」

そう思っただけで胃がぐうぐう鳴った。塹壕からのびあがり、目が痛くなるほど空を見つめて待った。

間もなく空の一角にこうごうと力強い響が起って、大型の輸送機が雲と雲の間に、たのもしき姿を現した。

「お来た、来た」

誰もが夢中であつた。が、山岳地帯には雲が低く重なつていて、機上から、地上部隊を見つけるのは、なかなか容易でない

らしい。飛行機は雲間をぬってしきりに旋廻した。

「おい、ここだここだ」

たまらなくなった二三の兵は、塹壕の上に躍りあがって狂気のように日章旗をふりまわした。

それと見た敵は、一せいに弾丸をあびせかけて来た。

「こら、危い。ひっこまぬか」

戦友はびっくりして、引きずり下そうとした。けれどもその兵たちはきかなかつた。

「弾が一つや二つあつたって、これがじつとしておられるか」

と、さかんに旗を振った。

飛行機は友軍の危急を救おうと、決死の覚悟で雲の中から、ぐうん！と下へ突込んで来た。

「あ、危い」

山にぶつかろうになつて、さっと翼をひるがえし、巧みにもとの姿勢に立ち直った。

その時、座席から日章旗が出て、さっとひるがえつた。「わかつた、見つけたぞ」という合図である。

「万歳」

「万歳」

全線からいっせいに歓声がわきあがつた。

飛行機からは次々に糧食が投下された。空中に落下傘がパッパッと開いて、白い花のように美しかった。

しかし、無事に下まで届くのは米俵ばかりで、樽詰めのらっきょうなどは、途中で空中分解するか、運よく地面に届いても着いた途端にこわれて飛び散り、強烈な匂をばらまいた。

だが、戦線ではぜいたくを言っておられない。おかずなどはどうでもよい、米の飯がたべられるだけでも、もったいない

のである。

「そら炊事だ。快々的快々的（早く早く）」

「折角の米の飯だ。うまいところをたのんだぞ」

「やわらかすぎずこわすぎず。水加減火加減に気をつけてくれ」

「おいおい、炊事当番、そんなことはどうでもよいから、早いところをやってくれ、先代萩の殿様ではないが、おれはもう待ちかねた」

「意地のきたない殿様だ。腹はへつてもひもじゅうないのが、武士のたしなみだ」

「何でもよいから早いこと早いこと」

口々に勝手な注文をつけて炊事当番を激励した。

五つのらつきよう

「一装用の飯をたいて少尉殿によるこんでいただこう」

永沢一等兵は山を下って炊事を始めた。一装用とは、ここでは上等という意味の連隊語である。

炊事も水汲も、なかなかの冒険である。ちよつとでも姿を見せようものなら、待構えている敵は、たちまち狙撃をする。折角もってかえった飯盒や水筒を撃ち抜かれて、泣くにも泣けなかった例がいくらかもある。

その上山西戦線は水が悪いことで有名である。どの水たまりもドロドロの赤い泥水で、キラキラと無気味な金気が浮いている。

永沢一等兵は、慰問袋の布で泥水を漑して米をといだ。しかしいくら漑してもきれいにならない、飯盒から流れるとき水はココアのような色をしていた。

それでも御飯が出来上った。シュウシュウと飯盒の蓋をふき

あげてこぼれる汁、そしてふつつと鼻をつくうまそうな匂い。一等兵の空腹の虫はぐうぐうと鳴き始めた。

「一装用にふかしたぞ。見てみる、きつと、かきの穴が出来ているから」

手を焼いたり耳たぶをつまんだりして、ようやく飯盒の蓋をとってみたが、その瞬間、

「あッ」と目を円くして驚いた。

「これはいかん、本物のかに穴になってしまった」

一等兵はいましましげに舌うちをした。

出来のよい御飯の上面には、蟹の穴のようにブツブツといくつも小さい穴があくものである。飯盒の御飯にもその穴があいてはいたが、煮えたつた時、水にまじった泥が上にふきあげて、五粒くらいの厚さで表面を掩っていた。一等兵が驚いたのも無理はない。泥にうがった本物の蟹の穴そっくりなのである。

一等兵は、その上の方をはいで自分がたべることにし、下のよい御飯だけを少尉の弁当箱につめて、山の上の陣地へかえった。

塹壕の中で、愉快な食事が始つた。泥にはよぐれ、髭はぼうぼうとのびた顔をほころばせて、うまいうまいと舌つづみをつた。その中に誰からともなく、山の崖にくだけて飛散つた、らつきようの話が出て、「あれは残念なことをした。今なら、らつきよう一つと、弾一つをとりかえてもいいがなあ」と、言つたものがあつた。

木島少尉も、

「あれこそ一個千金だね」

と、言つて笑つた。

すぐそばにいた永沢一等兵は、急に箸を捨てて立上つた。「少尉殿、しばらく御飯をお待ち下さい」